

古代南山城と渡来人 —馬場南遺跡文化の前提—

井上満郎

1. 南山城の地理環境

馬場南遺跡の所在する地は、ふつう南山城と称される。本来的にヤマシロと呼ばれたのは文字通りに山のウシロ、すなわち大和地方（奈良盆地）から見て奈良山（平城山・寧楽山）を北に越えた地、つまり現在の木津川市山城町あたりをいう。ルートはいくつかあるにせよ、いわゆる古北陸道が平城京ないし奈良盆地から北上し、京都盆地に達してすぐの地がヤマシロと認識された地であった。事実、当初のヤマシロ国府が置かれ（『山城町史』本文編）、またのちに恭仁京が営まれたのは（『加茂町史』古代・中世編）、まさにこの近辺が山城国の中心であることをものがたっている。やがてそれがのちに拡大して、律令国家の時代には京都盆地全域をさす呼称となっていく。元来は三輪山周辺をいうのみのヤマトが、やがて奈良盆地、さらにはその南部の山林地域までもが大和国と呼ばれるようになったのと軌を一にする。

要するに南山城は、京都盆地においていわば最初にひらけた先進的で先端的な地だったのであり、この地の古い時代の文化のありようは、のちの北山城の長岡京・平安京が宮都であった時代とは大きく異なるものだったことに注意しなければならない。南山城を行き交う人と文化の具体的なすがたは、『万葉集』に多くの歌枕の地が見えていることにも知ることができるが（奥野健治氏『万葉山代志考』、森本茂氏『校注歌枕大観 山城篇』）、こうした外部からもたらされた開明的な要素による環境と、地域に自生的に形成された人と文化とが融合し、より新しく、また高い文化をつむぎだす地域であったとってよからう。馬場南遺跡の遺物と遺跡が示す文化のことは、このような南山城地域の持つ豊かで多面的な環境からも考えてみなければならないと思う。

2. 高句麗使節の来日

欽明天皇 31 年（570）、高句麗（こうくり(コグリョ)（現在の朝鮮半島北部から中国東北地方にかけて存在した国家。668 年滅亡）からの外交使節が倭国にやってきた。その様相は『日本書紀』に詳細に記されているが、以下に検討してみたい。

この年四月二日、「泊瀬柴籬宮」はつせしばきのみやに行幸していた欽明天皇のもとに、「越人江沼臣裙代」こしのひとえぬのおみもしろ

が上京し、報告をもたらした。「高麗^{こま}の使人^{つかい}」が「越^{ほとり}の岸」に「漂流^{ただよ}」い着いたというものであり、報告したのが江沼氏であることから、その地がのちの加賀国（石川県）あたりであることが判明することも興味深い。後世のことではあるが、越前・加賀・能登地方は中国や渤海からの商人や使節がしばしば来着する地でもあり、そうした交流・交渉のルート^ののさきがけともいうべき事象でもあった。

すなわちこれが「高麗」（高句麗）国からの初めての公式使節であった。外国と倭国との外交関係がどうもたれたかについては不明な点も多いが、朝鮮半島南部の加羅諸国（い^かわゆる任那^{みまな(イムナ)}）、また百濟^{くだら(ベクジ)}・新羅^{しら(シルラ)}とは早くから交流・交渉は持たれていたと考えられるが、北部に位置する高句麗とは国家的な公式のそれは長くもたれず、それがこの時に始まったのである。そういう意味では日本の対外関係において画期的な意味を持つ出来事なのだが、それはともかくとしてこの報告を受けた天皇は、都から迎えを差し向け、「山城国の相楽^{さからかの}郡^{こおり}にして、館^{むらつみ}を起てて」安置するようにと命じた（『日本書紀』欽明天皇31年4月乙酉<2日>条）。そしてただちに「磯城島金刺宮^{しきしまのかなさしのみや}」にもどり、使者を派遣する（同4月是月条）。

この迎えの使者にともなわれて高句麗使節は、まず「近江」（滋賀県）にやってきた（同七月壬子朔条）。それを二人の使者が迎えに行くのだが、それは「難波津^たより発ちて、船^{ふね}を狭狭波山^{ささなみやま}に控き引^ひして」「近江の北の山^こ」で迎え、「山背の高槓館^{こまひのむつろみ}」に安置し、ついで「相楽の館^{さからかの}」で饗宴をもうけたという（同7月是月条）。湖西にそって古北陸道が陸路として貫通してはいたが、古代交通の常識の上では今も北岸に塩津・海津、南岸に大津などの「津」名を持つ地名を残すように、近江国は基本的に琵琶湖の湖路をとった。そのコースが想定されていることは確かなのだが、船を「難波津」すなわち大阪港から、「狭狭波山」つまり逢坂山（滋賀県大津市）を越えさせるとか、「高槓館」と「相楽の館」との関係など理解の困難さも記事中に残る。さらにいえば、「越」の地の豪族である「道君^{みちのきみ}」が自分を「天皇^{すめらみこと}」だといつわったことなど、六世紀段階の地方社会のあり方について興味深い点も多いのだが、それはここでは考察外のこととしたい。要するに高句麗から倭国への最初の使節は、到着地の北陸地方から大和へと移動、その途次の相楽郡にあった施設にいったん安置され、迎接を受けることになったのであった。

そこで考えるべきは、それがなぜ相楽郡という南山城の地なのかということである。まず考え浮かぶのは、当然古北陸道（京都へ宮都が移って以後の北陸道と区別してこう称する）のことであろう。到着地からの彼らの移動の道筋をたどれば、のちの加賀国内にあたる「越」の「江沼」の地からこの道を経て、越前から琵琶湖北方にある低い山系を越えて近江、さらに大和へとということになるから、単にその道の中継地近くにあたるから、ということも考えられないわけではない。

3. 「相楽館」と「高槓館」

この時に彼ら使節が安置され、迎接を受けたのは、「相楽館」でありまた「高槓館」であったという。

「相楽館」の名称については後世の相楽郡に見られ、また今も「相楽」の地名を残している。木津川市相楽という地名だが、現在はサガナカと読んでいる。歴史地名としての「相楽」は、大東急記念文庫本『和名類聚抄』が郡名に「アヒラカ」とするものの、郷名の「相楽」の箇所には諸本は「佐賀良賀」（高山寺本）・「佐加良加」（大東急記念文庫本）とするように本来は「サカラカ」であろう（池辺弥氏『和名類聚抄郡郷里駅名考証』参照）。今も相楽神社があり（木津川市木津町相楽清水。九条家本『延喜式』神名帳では「サカラカノ」神社とする）、本来的な地名としての「相楽」は、後世の相楽郡域とは異なり、おそらくこのあたりの狭い範囲をいうものかと思われる。

とすると、この地は古北陸道には面していない。むしろ古山陰山陽併用道に面している（足利健亮氏『日本古代地理研究』）、高句麗使節の大和入りのコースとは離れてしまうことになる。相楽郡郡衙の位置は現在のところ未詳だが、相楽郷の地にあったと思われるから（『山城町史』本文編）、「相楽館」の位置も素直に考えればこの近辺が想定されねばならないだろう。この想定が当たっているとすると、高句麗使節たちが迎接を受けたのは、普通は木津川右岸と認識される古北陸道ぞいの「相楽」の地ではなく、左岸の、それも古山陰山陽併用道ぞいということになる。

高句麗使節が迎接された施設は、他方で「高槓館」とも称されている。「コマヒノムロツミ」と読まれているが（日本古典文学大系『日本書紀』・新編日本古典文学全集『日本書紀』。日本古典全書『日本書紀』は「コマヒノタチ」とする）、高・コマは高麗で、高句麗のことを指すのだろうが、槓・ヒについては「厠中の大小便を受ける器」（日本古典文学大系『日本書紀』）とか、「槓」を導水路の樋と考えて「高麗流の槓のある船を繫留しておく建物」（新編日本古典文学全集『日本書紀』）なのでの表記であるとか、諸説は一致を見ていない。訓みがコマ・ヒであることは動かないし、それに応じての高・槓という用字であって、成案はないが、ここは文字だけでなく、コマ・ヒという音からも考えてみる必要があるように思う。

4. コマ氏の居住

高句麗使節が滞在した地は、以前から高句麗系の渡来人と密接なかかわりを持つ地域であったことが推定される。

それを傍証するのは、南山城地域における高句麗系渡来人の広範な居住である。現在も

南山城には上狛（木津川市山城町）・下狛（精華町）・狛田（同。ただし下狛村・菱田村合併による地名）などの地名が残っているし、また近時まで高麗村（木津川市山城町。ただし明治22年（1889）町村制施行による合併村名）も存在した。また『万葉集』の歌枕を検出すると、コマに関わるそれとして「狛山」が見えていて（巻6・1058）、これは「恭邇新京を讀る歌」への反歌として詠まれているから、この「狛山」はおそらくは木津川右岸、古北陸道の川を渡ってすぐの地、現在の上狛あたりをいうものであろう。また「泉狛村」（天平宝字6年「造金堂所解案」、『大日本古文書』編年文書16）、さらに「狛野」（『続日本紀』天平神護元年8月庚申朔条）も見え、こちらは和氣王の謀反に関連する記事中の登場で、和氣王が紀益女とともに逮捕されて伊豆国への流罪となる途中、「山背国相楽郡」で処刑されて、「狛野」に埋められ、益女は古山陰山陽併用道分岐後の（藤岡謙二郎氏編・足利健亮氏執筆『古代日本の交通路』1）、古山陽道ぞいの「綴喜郡松井村」（京田辺市松井）で絞首に処されたというから、この場合の「狛野」は木津川左岸になるのであろう。いずれにせよ、南山城の地には多くの高句麗系渡来人の足跡が刻まれていたことをここでは確認しておきたいのである。

高麗寺のこともこれと関係する。この寺のことは早く『日本靈異記』（『日本国現報善悪靈異記』）に見えていて（同書中巻第18）、「山背の国相楽の郡の部内」にあったとしている。この書物の成立は「弘仁13年後間もない頃とするのが通説であるが、それも含めて、弘仁年間（810～24）としておくのが無難」なようで（小泉道氏『日本靈異記』解説〈新潮日本古典集成〉）、すなわち中身的には奈良時代のことをあらわし、高麗寺もこの時代には確実に存在していたことになる。この寺院については早くに調査が行なわれていて、遺物や遺構の様相から飛鳥時代にさかのぼる寺院であることが分っている（「高麗寺址」、『京都府史蹟勝地調査会報告』第1冊・大正8年6月）。以後の調査においてもこれは確認されていて（多くは旧山城町教育委員会によるもの）、高麗寺という寺名の寺院が南山城の地に存在し、そしてその寺名から考えてコマ氏によって支えられていたものであることが推定される。

このコマ氏の南山城居住は、いつのことにかかるのか。渡来人の渡来と定着についてはその多くが時期を明らかにできないが、コマ氏の南山城の場合も同様である。これについては新羅を母国とする秦氏、加羅（伽耶）・百濟をそれとする漢氏が明確な渡来伝承を持つのと大きな違いであるが、ともかくコマ氏にはそれが記されない。

その原因のひとつは、後世に多くの名を残すコマ氏が、記録者たちにとって記憶に新しい時代の渡来であるからだろう。政界においても活躍する高麗氏は、668年の高句麗国滅亡を契機として渡来した人々を始祖とする。本姓を「肖奈」とし、その「祖」は「福德」

で、唐の攻撃によって「平壤城」(現在の朝鮮民主主義人民共和国首都)が陥落したのを契機に倭国に渡来して、「武蔵」に居住するにいたったという(『続日本紀』延暦8年10月乙酉<17日>条)。武蔵国高麗郡(埼玉県)は、駿河国以下甲斐・相模・上総・下総・常陸・下野の七か国の「高麗人千七百九十九人」が移されて生じた郡名であるが(『続日本紀』靈龜2年5月辛卯<16日>条)、ためにのち天平勝宝2年に「肖奈王」姓を「高麗朝臣」姓に変更している(同書天平勝宝2年正月丙辰<27日>条。『新撰姓氏録』左京諸蕃下参照)。したがってこのコマ氏は高句麗使節の初来日よりずっと以後の成立であって、これより早く大宝3年(703)に「王姓」を賜った高麗王若光の高麗王氏とともに(同書大宝3年4月乙未<4日>条)、当然欽明天皇31年の高句麗使節来日の際の「相楽館」での安置・迎接をめぐる事象とは関係しない。

高句麗使節の来日のあった欽明天皇朝において、高句麗からの渡来現象のあったことは疑いない。すなわち欽明天皇26年(565)、「高麗人頭霧耶陞等、筑紫に投化て、山背国に置り」とあり、この時の「頭霧耶陞等」は「畝原・奈羅・山村の高麗人の先祖」だという(『日本書紀』欽明天皇26年5月条)。「畝原・奈羅・山村」については、「奈羅」はおそらく山城国久世郡那羅郷(ならか郷)のことで(『和名類聚抄』)、また久世郡に「奈良野」も見えていて(『日本三代実録』元慶6年12月21日条)、現在に八幡市上奈良・下奈良の地名を残している。「畝原」・「山村」は明確ではないが、「山背国」であることは動かないから、同じく南山城地域に想定してもそう大きな誤りはないと思われる。古代の山城国には、多くの高句麗系渡来人が繁栄していたのである。

また同じく欽明天皇朝のこととして、大伴狭手彦が高句麗を攻撃し、その王都を陥落させて「高麗の囚」を獲得し、これを天皇に献上したが、それが「今の山城国の犯人」であるといっている(『日本三代実録』貞観3年8月19日条)。この欽明天皇の時代は、朝鮮半島において確かに高句麗がかなりの混乱をきたし、また百済と新羅もしばしば紛争を起こしていた。とりわけ百済は聖明王が殺害されるなど、国家の滅亡ともおぼしき事態が起こった時代であり、こうした事態は高句麗・新羅・百済、また加羅(任那)を問わず、渡来人が渡来するにいたる大きな契機・原因をなした。朝鮮半島の北部にあって、距離的には遠い高句麗からも多くの人々が倭国を目ざして渡来してきたのである。初めての高句麗使節の来日のコースが日本海経由であるように、朝鮮半島から北陸地方へ、ついで古北陸道を経て南山城の地に到着した人々が多かったと思われるし、この推定には新(8~23)の王莽によって主として鑄造された「貨泉」が、日本海岸の京丹後市久美浜町の函石浜遺跡から発見されていることも参考になろう。とにかく南山城の地は、コマ氏をはじめとする彼ら渡来人たちによって伝えられた、先進的な文化・文明が咲き誇る地域であった。

欽明天皇朝に高句麗からの渡来人の京都への渡来があったことはこうして確認できるのだが、ではこれ以前には高句麗からの渡来はなかったのか。

5. 狛氏の諸氏族

高句麗からの渡来系氏族については、高麗氏のみがコマ氏ではないことに注意が必要であろう。

たとえば別字で表現する「狛」氏がそれで、このコマ氏は首・造をカバネとした。

まず首姓の狛氏については、「狛首 高麗国安岡上王より出るなり」とあり（『新撰姓氏録』右京諸蕃下）、安岡上王は安原王（在位 531～45）のことで（『三国史記』高句麗本紀。佐伯有清氏『新撰姓氏録の研究』考証編五参照）、これに史実性ないしそれに近いものを認めると、狛首氏の渡来は欽明天皇朝前後ということになる。実名としては「狛首乙山」（法華寺旧境内出土木簡）・「狛首多須麻呂」（平城京左京三条二坊出土木簡）・「狛首」某（飛鳥池出土木簡。以上「奈良文化財研究所木簡データベース」による）などがあるが、いずれもその居地なり本貫なりは推定できない。

造姓の狛氏は、「狛造 高麗国主夫連王より出るなり」とあり（『新撰姓氏録』山城国諸蕃）、何人かの人名が見られるが、山城国関係文書と推定されるなかに「狛広氏」「狛氏守」が見えていて（寛平^(ママ)4月25日「山背某池地直銭請文」、『唐招提寺史料』1113）、狛首氏と考えられている（佐伯氏前掲書）。「狛造」氏が山城国諸蕃に分類されていること、また『新撰姓氏録』山城国神別に配されている「狛人野」氏などとあわせて、京都盆地に広範に高句麗系渡来人たちが居住したことは疑いない。

「狛人」氏についてはすでに触れたように、山城国での居住が確実である（『日本三代実録』貞観3年8月19日条）。この一族は河内国に居住しており（『新撰姓氏録』未定雑姓河内国）、「狛人 高麗国須牟祁王の後なり」とある。この「須牟祁王」おそらく高句麗の始祖とされる鄒牟・朱蒙^(チュモン)のことであるが、同系統かに問題は残るが山城国にも山背国相楽郡人として「狛人黒麻呂」「狛人麻鳥」が見えていて（「正倉院丹裏古文書」第2号、『大日本古文書』編年文書25）、これまた京都での居住は疑いない。なお、相楽郡の地に「狛部宿禰奈売」の名が多産の女性として見えているが（『続日本紀』和銅4年7月戊寅<5日>条）、「狛部」氏は他に見えないものの、この氏族名が高句麗系の氏族にあたることは疑いないから、やはり南山城における高句麗系渡来人の足跡を示すものといっていよう。

また『新撰姓氏録』は山城国に本貫を持つ「高麗」の渡来人として他に、「黄文連」氏・「桑原史」氏・「高井造」氏・「八坂造」氏をあげている。

「黄文連」氏については久世郡久世郷に「黄文連乙麻呂」「黄文連黒人」（天平勝宝九歳四月七日「画工司未選申送解案帳」、『大日本古文書』編年文書13）、同じく久世郡の「黄文川主」（天平宝字2年2月24日「画工司移」、『大日本古文書』編年文書四）、などが見えていて、絵画制作にあたる画工司にたずさわる人物が多いのが特徴で、黄書画師の伝統を受け継ぐものであることは確実である。その伝統が馬場南遺跡の時代にまで継承されていたことも、疑うことはできない。

「八坂造」氏は今に八坂（京都市東山区）の地名を残すように、愛宕郡八坂郷（『和名類聚抄』）に居住し、「八坂馬養造 鯖壳」の名も見えている（天平4年「山背国愛宕郡計帳」、『寧楽遺文』上）。ここに位置する法観寺、別名八坂寺は、この氏族の建立によるものと考える説も強い（石田茂作氏『飛鳥時代寺院址の研究』）。

以上、詳細に見たように、とにかく南山城には多くの高句麗系渡来人が居住し、地元社会において先進的な文化・文明を築いていたのである。その広がりには山城国全体にまで及ぶが、とりわけ南山城地域におけるそれは記念的であった。

さらにいえば、南山城の相楽郡の地には大狛郷・下狛郷があった（『和名類聚抄』）。早くに「大狛郷」は見え（年月日未詳「相楽郡司解」、『大日本古文書』編年文書23）、さらに「相楽郡大狛里」という里制下の表記もあるから（平城京左京三条二坊出土木簡）、少なくとも奈良時代前期には大狛郷は存在していた。「大狛郷」として、わざわざ“高麗”郷の用字を使用していないのは、668年の高句麗国滅亡による高句麗からの渡来人に起源を持つのではなく、先に引いた欽明天皇朝の史料が示すように、それ以前からの高句麗国からの渡来人の居住からきた郷名であることを示すように思われる。

「下狛郷」は「之毛都古末」（大東急記念文庫本）の訓が示すように、シモツコマであろう。この「下狛郷」の表記は他に例がないが、常識的には上狛があって、それに対しての下狛である。「上狛」郷の歴史上での表記もないが、下狛郷はおそらくは大狛郷に対するもので、したがって大和から見て近い地域が「上」で、遠いのが「下」である。現在地名の上狛・下狛に対応すると考えてよく、いずれにしても南山城地域における高句麗系氏族の居住を物語るものであることは間違いない。

6. 地域の人々の信仰

南山城における高句麗系の渡来系氏族の様相について、不十分ながらも考えてみた。しかし南山城の地に住んだ渡来系氏族は、高句麗系ばかりではない。他にも豊かな文化・文明をもたらした渡来系氏族たちがいた。

仁徳天皇の時代、「大后」であった「石之日壳」皇后は「豊の楽」のための「御綱柏」

を採取するために「木の国」(紀伊国)に出かけた。するとその間に夫の仁徳天皇は「八田の若郎女」に心を奪われてしまった。それを知った皇后は夫の待つ難波高津宮には帰らず、いわば実家である大和の葛城に帰ろうとする。淀川をさかのぼり、川筋にしたがって「山代」(山背・山城)にいたる。そしてさらに「那良の山口」でとどまり、そこで歌を造ったのち「箇木の韓人」「名は奴理能美が家に入りましき」という(『古事記』下仁徳天皇段)。

「箇木」は後世の綴喜郡の綴喜だし、「韓人」は文字通りに「韓」からの人で渡来人を示す。「奴理能美」の名は、調連氏の始祖の「百済国の努理能美」(『新撰姓氏録』左京諸蕃下)、民首氏の始祖の「百済国の人努理使主」(同書右京諸蕃下)・「百済国の人努理使主」(同書山城国諸蕃)、水海連氏の始祖の「百済国の人努理使主」(同書河内国諸蕃)などとして見えていて、百済国に関わる人名である。南山城である「箇木」の地には百済系の渡来人も居住していたことを物語るものであって、とにかくこの地域が豊かな渡来文化の開花した場所だということが理解できよう。

ところで、南山城には「神雄寺」をはじめとして多くの寺院が存在し、またその多くが今も存在する。しかしながらそれらの多くは、草庵のようなごく小さい規模からはじまり、起源の不明なものが多い。馬場南遺跡にほとんど隣接し、南山城きつての名利である浄瑠璃寺(木津川市加茂町)もそうで、その起源についてはよく分かっていない。南山城の寺院の多くは、浄瑠璃寺・岩船寺・海住山寺などをはじめ、聖武天皇や行基、また良弁に結ぶなどするものが多いが(『加茂町史』古代・中世編、『大和古寺大観』7ほか)、これは奈良に近いことと、聖武による恭仁京遷都が影響してのもので、歴史的には信頼性は低いといわざるをえない。

要するに南山城地域における信仰のありようは不明なものが多く、また国分寺は別として寺院の規模もけって大きくない。ということの原因のひとつは、それらが国家的でなく、地元的というか、地域の民衆レベルの祈りと願いを基底としているからと考えることができるように思う。そしてそのレベルは、以上に述べてきたように渡来人・渡来文化を大きな基層文化としており、かなりに進んだものであったといえよう。馬場南遺跡なり「神雄寺」なりも、確かに「民衆レベル」のみでは解けない遺物・遺跡もたくさんあるけれども、こうした背景をも勘案しながらその歴史的な性格を考えねばならないのではないか。迂遠なことを知りながら煩雑な南山城の渡来人、特に高句麗系のそれについて考えてきたのは、まさにそういう意味であった。

(2010年6月稿)

(いのうえ・みつお=当調査研究センター理事・京都産業大学教授)